

青木繁が訪れた明治期・館山の水産業と経済人ネットワーク

愛沢伸雄（NPO法人安房文化遺産フォーラム代表

青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会事務局長）

1. はじめに

青木繁ら若き画家たちが小谷家に逗留した明治期の館山は、どのような地域であったか。当時、近代水産業のパイオニア関澤明清や銀座資生堂創業者の福原有信、あるいは地元水産界の代表である富崎村長神田吉右衛門をはじめ、千葉県議や衆議院議員の経歴をもち安房銀行（千葉銀行の前身）・房総遠洋漁業株式会社の創業に関わっていた小原金治などが重要な役割を果たしていた。

1878（明治 11）年、東京・霊岸島と館山間に汽船が就航し、5時間と大幅に短縮され、新鮮な農水産物が大量に輸送される時代となった。1904（明治 37）年、青木繁と同行した福田たねも、「霊巖島を夜9時に出て、朝館山に着いた」と証言しているように、多くの文人墨客がこの航路を利用している。海路を通じて人びとの往来とともに、いわゆる「文明開化」や「殖産興業」の大波が館山に押し寄せてきたのである。

近年、館山市布良の小谷家住宅からは水産関係資料、また館山市南条の小原金治の生家からは自筆の『自叙伝草稿』（以下、「草稿」）などが発見された。それらの資料から、明治期・館山における殖産興業、なかでも水産業と経済人ネットワークの一端を紹介したい。



2. 近代水産業の先駆者・関澤明清

明治期の半ば、館山の地においてモデル的な遠洋漁業事業を實踐して、企業化をめざしたのは関澤明清という人物であった。彼は、1897（明治 30）年に志半ば、55歳で急逝したが、近代水産業の黎明期のなかで播いた種子は、確実に花開き、近代日本水産業の発展に重要な役割を果たしている。

関澤は、1843（天保 14）年に加賀藩士関澤六左衛門の次男として生まれた。幕末の江戸において江川太郎左衛門や大村益次郎から蘭学や航海術を学んだ後に、藩の密命を受けてイギリスに渡っている。



維新後は政府の官吏となり、ウィーン万国博覧会やフィラデルフィア万国博覧会に事務官として参加している。その時に見聞した欧米の水産業のあり方、その水産品と加工技術に驚き、日本の殖産興業にとって重要な施策になっていくと考え、自ら水産の世界に分け入って実業家になっていった人物である。

まず関澤は、アメリカ式近代捕鯨やサケ・マスの人工ふ化、缶詰製造法を習得して日本に導入している。また、千葉県でイワシが不漁となった際、関澤は九十九里海岸において、従来の揚繰網とアメリカ式巾着網を折衷した改良揚繰網漁法によるイワシ漁に成功している。その漁法は効率がよいものであったので、その後全国に広がり沿岸漁業に大きな影響をもたらした。

さらに館山町に隣接した豊津村（ともに現館山市）において 1888（明治 21）年、渋沢栄一や大倉喜八郎らの企業人の出資を得て、日本水産会社を設立している。関澤は、加知山村（現鋸南町）の捕鯨組・醍醐新兵衛に依頼して伊豆大島までの東京湾口域を漁場とする捕鯨事業を進め、主に鯨油生産を目的としていた。この時は豊津村での搾油所経営のみを考えていたが、結局は捕鯨そのものがうまくいかず経営不振となり、3年あまりで解散している。

そこで関澤は私財を投じて、その会社の施設設備を買い取り、今度は政府の官吏を辞めて、自ら関澤水産製造所を創業し企業人になったのである。そして、洋式帆船豊津丸を新造してマグロ漁に出かけ、遠洋漁業の範を示していった。この会社が房総遠洋漁業株式会社の礎となり、後の東海漁業と変遷していった。

ところで関澤は水産教育の重要性を説いて、1889（明治 22）年に大日本水産会が水産伝習所を設立することに尽力している。この伝習所では、漁撈・製造・養殖

の3科による実習を重視して実践的な水産教育をめざしていた。その初代所長になった関澤は、自ら水産人の育成に力を注いでいった。館山の地は当初より実践的な水産教育にとって重要な実習の場所となっていたのである。富崎村布良(現館山市)の小谷治助・喜録宅も実習先の一つであったことは、近年発見された関澤自ら書いた礼状とともに、その時に贈られた「日本重要水産動植物之図」【表紙2】によって確認できた。

1897(明治30)年には、伝習所第3回卒業生である長尾村根本(現南房総市)の小谷仲治郎が、兄源之助とともに渡米しモンレー湾域で器械式潜水のアワビ漁に成功している。帰国後は安房水産会会長として尽力し、潜水士養成などの水産教育を支援している。なお、モンレーの日系人村には尾崎行雄や竹久夢二、高松宮夫妻なども立ち寄り、七浦村(現南房総市)出身の俳優早川雪洲の兄も潜水士として活躍していた。

同年、関澤は館山で急逝したが、実弟の鏑木余三男がその遺志を継いで房総遠洋漁業(株)の創設を呼びかけた。1899(明治32)年には、安房銀行の資金や国からの遠洋漁業奨励金が投入されて、館山町館山に営業所が開かれている。定款の目的は「海獣海魚の捕獲・販売」となっており、つまり北洋のオットセイ・ラッコ猟を主とする本格的な水産会社が設立されたのである。

設立総会では小原金治が取締役社長になり、鏑木余三男が取締役、監査役に神田吉右衛門、顧問に安房郡長であった吉田謹爾が就任している。金治の「草稿」にも「我千葉県ハ太平洋ニ面シ古来漁業ヲ以テ全国ニ冠タル地位ニアリ故ニ學術進歩ノ現代ニ於テ西洋形帆船ニテ遠洋漁業ノ先駆者タル」と記されている。

大日本水産会の水産伝習所は、1897(明治30)に官立の農商務省水産講習所となり、戦後は文部省所管の東京水産大学、東京海洋大学となっていく。1901(明治34)年には講習所の館山実習場が開かれて以来、現在の同大学館山ステーションに至っている。同年に進水し

た日本初の水産練習船「快鷹丸」は、館山湾で訓練を重ねた後、1907(明治40)年にサバ漁調査で出漁した朝鮮海域(ポハン沖)で遭難し、現地の漁師たちに救助されたが、4名が亡くなっている。

近代水産業に大きな足跡を残した関澤のために、館山町北下台(現館山市館山)の町営公園に巨大な顕彰碑が建立された。そこには「此碑は水産家関澤明清君の功績を不朽に伝ふる為、明治三十年同志四百六十名より抛出の資金壹千有余円を以て建碑に着手し、同三十二年五月に竣工す」とあり、当時の日本水産行政の中心人物たちの氏名が発起人として刻まれている。

3. 水産改革を実践した富崎村長・神田吉右衛門

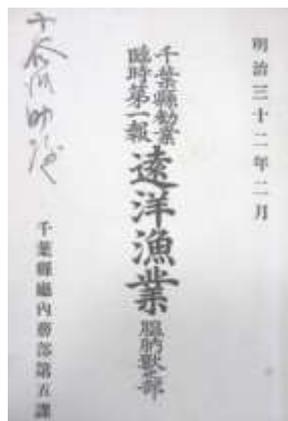
関澤顕彰碑の発起人として先頭に刻まれた名が神田吉右衛門である。神田自身もまた、富崎村のみならず館山の水産界にとって極めて重要な人物であった。



1834(天保5)年、布良の満井武兵衛の子として出生し、神田家の養子になり吉右衛門と呼ばれた地元水産業の発展のためにさまざまな施策を試み、村民から尊敬され、後には富崎村長となった。全国的にみても模範的な漁村をつくっていった。

施策として、器械式潜水でのアワビ漁を村営にし、収益で公共事業をおこなったという。水産増殖や遭難船の救済、あるいは漁師が助け合っていくためのマグロ漁遭難救助積立金制度や布良同盟保険を整えていったことも、当時としては画期的であった。また、少しでも遭難をなくそうと努力し、マグロ延縄船を布良型改良漁船にしたことは特筆すべき出来事である。

とくに、重要なことは、1893(明治26)年から6年間の村長時代、1896(明治29)年より3回にわたって富崎村



布良区水産談話会を開催している。その議事録には、「本村ハ漁業一途ヲ以テ生計ヲ経営ナスノ村柄ニシテ他ニ補業トスベキ道ナシ故ニ本業ヲ進歩ナラシメ本村ヲ保持セントスルニアリ」とあり、これまでの富崎村布良区の歩みを確認しながら、遭難を減らすためにどうしたらよいか、また水産振興のためにはどのような村政が求められるかを漁民たちと話し合いながら模索していった神田の姿がうかがえる。

なお、当時の富崎村布良区の遭難漁船数をみると、1893(明治26)年度はマグロ漁船数61隻のうち4隻遭難。'94年度は65隻のうち4隻遭難。'95年度は61隻のうち6隻遭難。'96年度57隻のうち2隻遭難。'97年度54隻のうち1隻遭難。'98年度52隻のうち4隻遭難。'99年度52隻のうち4隻遭難と報告され、多い時では漁船の1割近くが遭難していることになる。

青木繁らの逗留を世話した布良の小谷喜録は、大日本帝国水難救助会布良救難所看守長であった。近年小谷家から、遭難者家族救済のために保険事業を奨励する呼びかけ文書が見つかっている。これは1895(明治28)年、安房郡長であり安房国水難救済会主事の吉田謹爾が出状したものであり、館山出身の福原有信が経営する帝国生命保険会社(以下、帝国生命)が重要なカギとなっていたことがわかる。

この前年、福原は1888(明治21)年に設立した帝国生命の3代目社長になっている。布良同盟保険(神田吉右衛門が保険事務取扱人)の収支報告書において、取り扱い保険会社は帝国生命と明示されている。1896(明治29)年開催の第1回富崎村布良区水産談話会議事録を見ると、「吉田郡長(後述)ノ発意ヲ以テ帝国生命保険会社へ短期保険ニ加入シ水難救済会ニ換エンナヲ懇示アリ依テ当業者ニ謀リ差向ケ船一艘乗組中四名ヅツ加名センメタリ」との記載がある。

1899(明治32)年、神田は、関澤の実弟鏑木余三男や小原金治らとともに、房総遠洋漁業(株)の役員となり、1902(明治35)年に69歳で亡くなっている。

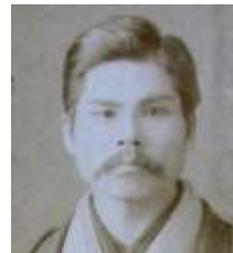
ところで、布良はマグロ延縄船の発祥の地であるといわれる。1881(明治14)年には83隻のマグロ延縄船があり、1909(明治42)年のマグロ水揚げ金額調査では全国の4分の1を占めていたという。多数のマグロ船が集まり、漁村として布良が繁栄した背景には、前述のように神田吉右衛門らが遭難救助積立金制度や布良同盟保険を整えたり、船大工豊崎吉太郎や政吉らが「布良型」に改良した延縄船を建造するなど、遭難を防ぐ取り組みがあったのである。ただ、延縄船建造のためには、多額

の資金が必要であり、大量のマグロを求めていた水産問屋が資金を融資したことで、今度は資金返却のために無理な操業になっていったことは否めなかった。

明治から大正にかけて、遭難船は約90隻に上り殉難者数も約350人と推定されている。そのために神田村長時代には富崎村布良区水産談話会を開催し、船主や漁師たちが真剣に遭難事故の原因を分析し、その対策に取り組んでいったことで、布良は「水産界におけるマグロ延縄漁業の覇者」と称されるようになったという。

4. 小原金治がめざした政治と殖産興業

房総遠洋漁業(株)の取締役社長となった小原金治とは、どのような人物であったか。資料もなく不明な部分が多いが、今回発見された「草稿」から紹介する。



1859(安政6)年、南条村(現館山市)の豪農であった父桂助と母かよの長男として出生。12歳のとき、叔父で館山藩士の小原(大館)義直から、初めて読み書きを学んでいる。その後、叔父を通じて館山藩士らのさまざまな人脈につながっていった。なかでも安房郡長の吉田謹爾と重要な関わりをもつことになる。折しも自由民権の嵐が吹き荒れていた時代、民権運動を通じて政治を見る眼や法律に強い関心を持ち、人生の大きな転機を迎えた。当時、北条村(現館山市)で開催された数回の民権演説会に参加し、東京からの演説者だけでなく、近隣の館野村(現館山市)出身の県議小原謹一郎や布良の若手活動家である満井武平らが熱弁を見聞し、その姿に共感して政治世界に入っていくと思われる。

激動する明治初期に、22歳の金治は大きな志をもって上京した。当時、著名な漢学者の岡千仞(鹿門)の塾に通い、夜は法律学校で学んだという。しかし、3年後に父が重病になり、やむなく帰郷したものの自由民権運動の高揚のなか1883(明治16)年には、北条村で開催された民権派演説会の弁士として登場し、翌年には南条村会議員に選出された。

村会議員時代、無法状態にあった房州白土採掘とその土地所有について村民から相談を受ける。白土とは房州砂として知られる磨き粉の原料である。さっそく法律を学んだことが生かされ、県や国に働きかけて村民が法的に守られる契約関係を取り交わすことになった。

相手は、「東洋煙草大王」の異名をもち、東京銀座で総合商社・岩谷商會を営む岩谷松平である。結局、岩

谷が社長となって白土採掘企業の安房坑業会社を設立し、金治も自ら取締役として入った。岩谷は福原有信とともに銀座で活躍していた経済人のひとりであり、水産関係の会社も経営し、後には東京選出の衆議院議員になっている。金治は、さまざまな商品を扱う全国的なネットワークをもつ岩谷商会から本格的な実業を学んだといっている。

その時期に、金治は布良の満井武平と盟友となっている。彼の叔父である富崎村長神田吉右衛門との交流が始まり、政治家がどうあるべきかを学んだと思われる。

1890(明治23)年、金治は満井とともに千葉県議会議員に当選した。当時、日本水産界を牽引する関澤や地元水産界の代表である神田らは、自らの手で近代的な水産事業のあり方を館山の地から模索している。金治と満井もまた県議の立場から協力して、殖産興業に取り組んでいった。

満井は大隈重信の立憲改進黨に入ったが、金治は党派にこだわらない立場をとっていた。県議3期目になった35歳の金治は、盟友の満井や角田真平(号竹冷)の仲介により大隈重信と会見し、大隈の政治理念に共鳴して、立憲改進黨の一員となっている。

衆議院の解散後の安房での候補者選定では、大隈の側近岡山兼吉らの説得もあり、金治は県議を辞して、立憲改進黨公認の衆議院議員候補者に擁立された。日清戦争が勃発した1894(明治27)年9月、第4回衆議院議員選挙に立候補している。立憲改進黨からは重鎮島田三郎らが応援に入るなど、安房国改進黨は全力をあげて金治の当選のために取り組み、その結果、自由党の加藤淳造を押さえて当選したのであった。

1897(明治30)年までの3年間の国会議員の活動では、注目される活動が3つあった。その1つが神田や満井らの水産業改革を応援しながら、関澤が館山を中心に取り組んでいた先駆的な遠洋漁業を進めていく法律に関わったことである。前述したように関澤自らが1896(明治29)年に遠洋漁業用の洋式帆船豊津丸(72トン)を建造して範を示していた。すぐに取り組んだ伊豆大島沖のマグロ漁も大成功であり、法律の策定に拍車を駆けていったと思われる。

翌年、政府は漁船の改良と大型化を図るために、またオットセイ・ラッコ猟業などの遠洋漁業の振興のために奨励金を出すこととした。この遠洋漁業奨励法は、洋式帆船や汽船による遠洋漁業を奨励することで、外国のオットセイ・ラッコ猟船の進出に対抗していく処置であった。房総遠洋漁業(株)では、この遠洋漁業奨励法によ

って政府や千葉県からの補助金を確保し、経営基盤の安定化が図られるとしていた。

2つ目には、千葉県議時代より正木貞蔵らの公的な海運事業「安房団体」を支援していた。水産業の振興のために、海運業の安定的な資金繰りを解決していく方策を構想していた。貞蔵は、安房郡役所の官吏でもあり、郡長吉田謹爾らとともに安房の産業振興に尽力していた。しかし、1880(明治13)年に船形村(現館山市)において北条汽船を設立して以来、地元の水産業の発展がなければ、殖産興業は進まないと考え、公的になるような汽船事業を呼びかけ、企業を立ち上げてきた人物である。後に船形町長となる子の正木清一郎も海運業を手伝うかわら、水産製造や漁業に従事し、農商務省の関澤らと水産博覧会事務をおこなったり、八丈島沿海の漁場水産調査に出向くなど、水産界をリードするさまざまな事業に関わっていった。

3つ目には、安房の殖産興業のため、資金を調達する金融機関の設立が急務であると、安房郡長吉田謹爾に相談していた。

前述したように吉田の外祖父は館山藩士で、金治の叔父とは藩士の仲間であり、8歳年長であった吉田とは、村議や県議の時代から強い結びつきがあった。金融機関を設置していく方策として、安房郡佐久間村(現鋸南町)出身で当時大物の大蔵官僚であった曾根静夫国債局長に相談したと推察される。曾根は日清戦争期に戦時国債の発行で戦費調達に成功させた人物として、金融界では大きな影響をもっていた。金治と吉田と曾根の三者連携のもと、経済人の福原有信や浅田正文らを発起人として、1896(明治29)年に安房銀行(千葉銀行の前身)を設立した。

「草稿」のなかで、「吉田氏ト会シ本郡ノ産業奨励ノ途ナキカラ各方面ニ涉リ終日協議其ノ時余ハ産業発展ノ途ニ金融機関ノ設立…銀行ハ人體ノ血管タルカ如シ」と述べている。吉田謹爾は、郡長を辞めて代表権をもつ専務取締役として銀行経営に取り組んでいった。

この年に金治は病気になり、静養に努めて快復したとはいえ、体調に自信がなかったようで、3年間の議員生活に終止符を打っている。秋山源兵衛を後継者に立てて当選させた金治は、地元の経済人として殖産興業の先頭に立っていくことになる。

なお、福原有信が安房の金融機関設立に関わった背景には、帝国生命保険会社と連携する金融機関なしに、遭難者家族救済の保険事業はできないと考えたの

であろう。住民の貯蓄意識を高めていくことが、資金調達でも重要と認識していたのである。

5. ふるさと館山の経済人ネットワークと福原有信

前述した福原有信は、1872(明治5)年に洋風調剤薬局の資生堂を創業し、日本で最初に医薬分業の理念を実践した人物である。1886(明治19)年の日本薬局方制定にも大きな役割を果たしている。



有信は、1848(嘉永元)年、布良に隣接した松岡村(現館山市竜岡)で、父有琳・母伊佐の四男として出生した。父有琳は漢学者であったが、福原家は代々医者で祖父有斎から長兄陵斎に家業が受け継がれていた。1863(文久3)年に26歳という若さで陵斎が、翌年に祖父有斎が亡くなったことで、16歳の有信は家業の医者を継ぐことが求められた。1864(元治元)年に上京し親戚の医者を頼って緒方洪庵の高弟織田研齋に入門し、幕末という動乱の時代にあって修業しながら幕府医学所で西洋薬学を学び、その後は幕府医学所頭取松本良順(佐倉藩順天堂総裁佐藤泰然の次男)から認められ、薬学の専門家として頭角を現していった。

明治に入って海軍病院薬局長を経て、1872(明治5)年に、23歳で東京銀座に洋風調剤薬局資生堂を開業した。有信は自ら医薬分業の礎を築いて、医薬分業を法制化するために日本薬局方制定に大きな精力を傾けるとともに、日本で最初の近代的な製薬業をおこしていった。1885(明治18)年には国策会社大日本製薬会社の創設に関わり、その間に日本最初の練歯磨「福原衛生歯磨石鹸」を製造・販売し、その後は医薬品だけではなく日常の生活衛生用品や化粧品の商品開発もおこなって、今日の資生堂の源流をつくったのである。

1889(明治22)年に不十分ながらも薬剤師制度ができ、日本薬剤師会を結成して医薬分業の先駆者であった有信が初代会長に推挙された前年に、帝国生命保険会社(現朝日生命保険相互会社)の創業に関わっていく。日本の近代的な生命保険事業では、1881(明治14)年に創業した明治生命保険会社が始まりであるが、有信はなぜ未知の世界である生命保険会社の設立に関わっていったのであろうか。

その経緯は、株式会社資生堂が刊行した『福原有信伝』(永井保・高居昌一郎編著者 昭和41年非売品)に詳しい。有信は41歳から亡くなる77歳まで帝国生命の

経営にあっていた。著者は会社設立について「一言にして尽せば全く運命的なものであった。有信自身の意志とは関係なく、自然にそのような運命に到達した」と、突然降って湧いた話のように記されている。その話とは海軍主計官加唐為重ら3名が軍法会議で有罪となり、獄中で構想したのが生命保険会社の設立という。加唐は義兄の大日本製薬会社支配人高橋為政に相談して、有信と会見した。その後、有信は海軍軍医総監高木兼寛に話したところ、生命保険事業は社会的な意義や将来性もあるので、積極的に支援する約束をしたという。高木に励まされ決心したものの、有信は帝国生命の中心には入らなかった。人事問題で揺れたこともあり、1891(明治24)年、帝国生命保険株式会社と社名変更した際の総会で、代表権をもつ専務取締役となり、3年後には第一線の社長に就任し、その年に業界のトップの業績にしている。

遭難者家族救済のために安房国水難救済会主事吉田謹爾や富崎村長神田吉右衛門らが帝国生命と協力し、衆議院議員小原金治が願っていた安房銀行設立に積極的に賛同し発起人になった有信の姿は、『福原有信伝』には記述されていない。しかも帝国生命のなかで取り組んでいた経営精神と重なるものの、本来の福原有信像とは違うものを感じる。

前述の生命保険を奨励する文書において、吉田謹爾は、わざわざ「本州出身の福原有信」と特記し、1つの生命保険会社を指定した意味はどこにあったのだろうか。1895(明治28)年には、前述したように富崎村布良区でマグロ延縄漁船61隻のうち6隻が遭難するという大変な事態のなか、有信は、隣村の布良で起きている大変な遭難の状況を知っていて、何とか手助けしたいというふるさとへの思いが、生命保険事業を起こしていく原動力になったのではないだろうか。

明治期に松岡村の福原家では菩提寺を正見院から遍智院(小塚大師)に変え、本堂のすぐ裏に有信の父母や兄陵斎の墓石を移し、有信の兄栄蔵が「福原之墓」を建立している(明治42年)。

松岡村隣の大神宮村では、1682(天和2)年に大神宮七人様と呼ばれる農民一揆がおこり、農民側が敗北して7名が処刑された悲話が語り継がれている。その30年後の1711(正徳元)年には、万石騒動という農民一揆が北条藩一万石の領地内でおこり、3名の名主が犠牲になったものの農民側が勝利した出来事もあった。

近年、「福原之墓」隣の真田家墓石群に、大神宮七人様の2名の墓が発見された。多分、万石騒動や大神

宮での農民のたたかいは、有信も知っていたと思われる。「福原之墓」に刻字されている人名や戒名をみると、布良や隣接した長尾村根本などの漁村と深い縁戚関係や、中世の安房を治めた大名里見氏の家臣を示唆させる縁戚関係をもっていたことがわかる。

有信自身は大正期の書籍のなかで、福原家が里見家臣「福原善七郎」と述べているが、里見氏安房守忠義公家中帳のなかには「福原善七」という人物がみえる。明治期になっても里見氏やその家臣団としての人脈は強固にあったうえ、松岡で生まれ育って伝え聞いている万石騒動三義民や大神宮七人様のこと、あるいはマグロ延縄船遭難のことなどは、有信の生き方や経営理念に影響を与えていたと考えられる。

この地には古くから、農民一揆や海難事故などで犠牲者が生まれた場合、遺族を物的精神的に補償し支え合う地域コミュニティの仕組みがあった。有信の生命保家の世界に入っていたのも、ふるさと館山のこうした先人の生き方を学んでいたのではないかと推察される。経済人として東京で成功したことにとどまらず、自らふるさと館山への支援や殖産興業に目を向けていったのである。

1886(明治19)年の日本薬局方制定では、その編集総裁が細川潤次郎であり、編集委員には福原と深い交流をもつ松本良順や高木兼寛、そして東京帝大医学部教授のベルツ博士がいた。細川は有信と繋がっていたことが縁であったのか、館山の万石騒動研究に関わり書籍を出版して、後に国分寺(館山市)の境内にある200回忌石碑の撰文者になっている。



そして、1898(明治31)年には、有信の長女とりが館山病院初代院長川名博夫に嫁いでいる。松岡村だけでなく館山町においても長女とりを通じて、深い絆が築かれた。東京帝国大学医学部出身の川名は、同級に入沢達吉や田代義徳がいる。

有信の幕府医学所時代に同僚であったのが、入江達吉の父恭平であり、田代義徳の義父基徳であった。つまり、東京帝国大学医学部のネットワークに、有信と川名博夫は繋がっていた。

川名は日本薬局方編集委員のベルツ博士からも薫陶を受けて転地療法に取り組んでいた。ドイツのコッホが結核菌を発見し、ツベルクリンが日本に伝わった際に資生堂薬局も扱っていた。その時期に館山の住民たち

は、近代的な病院設置を要望して資金を集めている。1891(明治24)年、安房郡長吉田謹爾に提出した嘆願書には「醫學士川名博夫氏當館山町ニ於テ開業シ獨国コツポ氏ノ發明ニ係肺勞ノ療法ヲモ兼ネ普ニ治術ヲ施シ度ニ付テハ地方有志者諸君ノ贊助ヲ得病院設置」と書かれている。なお、コッホのもとで学んだ北里柴三郎と有信とは面識があつて、後に帝国生命に北里の実弟袈裟雄が役員に入っている。

有信は財界の重鎮渋沢栄一とは経済人として交際があつたが、有信の四女美枝が渋沢の次男武之助に嫁いでいる。渋沢は東京の虚弱児童の保養所として、船形町(現館山市)に東京市養育院安房分院(現船形学園)を創設し、渡米する際には館山病院の二代目院長穂坂与明(川名博夫の女婿)が侍医として随行するなど、館山との縁が深い。

有信は明治から大正の激動する時代にあつて、帝国生命の経営を安定させながら、生命保険会社協会理事會会長として保険思想の普及のために全力を挙げている時に、関東大震災に遭遇し、その再建の最中、翌1924(大正13)年に77歳で亡くなっている。

小原金治と吉田謹爾もまた、安房地域に関わっていた経済人などのネットワークを通じて、地道に殖産興業の発展に努めていった。1914(大正3)年に吉田が亡くなると、金治は安房銀行頭取を引き継ぐとともに、千葉県内の金融界の重鎮として千葉銀行創設に安房の地から一石を投じて、1939(昭和14)年、79歳で亡くなっている。

最近、金治の生家からガリ版刷りで手書き部分もある「大正九年三月 安房郡在京者氏名録」が発見されている。明治期から大正期にかけて、政治・経済・教育・医療など幅広い分野で全国的に活躍した人物も見られ、安房ゆかりのネットワークは非常に興味深い。

